

愛南サイト

愛南町は愛媛県の最南端に位置し、松山市内から車で2時間半ほどの位置にある。黒潮が流れ込む、豊かな海の恵みを活かし、漁業(カツオ、マグロなど)と養殖業(真珠貝、ヒオウギ貝、牡蠣、真鯛など)で知られた地域である。愛南ゴールドをはじめ、日当たりのよい傾斜地での柑橘の栽培も盛んだ。SUIJI国内サービ斯拉ーニングでは、町内の銭坪集落に4年間(平成25～平成28年度)、外泊集落に1年間(平成28年度)、お世話になった。



【銭坪(ぜにつぼ)】

御荘湾の入口に位置する銭坪は、波静かな湾を利用した真珠母貝や牡蠣の養殖、傾斜地での柑橘の栽培を生業としてきた集落である。愛南町中心部や町外に職を求める人も多く、昭和30年代頃まで20世帯ほどあった世帯は近年では10世帯ほどとなっている。

銭坪での活動は、尾崎功一さんの「船小屋」と畑横の土地に設営したテントを拠点として行われた。尾崎さんは、17歳で大阪に出て、約50年間会社経営に従事した後、愛南町に戻り、故郷・銭坪に再び賑わいを戻そうと薬草栽培事業などに取り組んでいる方だ。「自分のことを自分でできない者は、地域のために何かすることもできない」との尾崎さんの投げかけを受け、寝場所となるテント設営から、毎回の食事の準備、洗濯、掃除を自分たちで担うことが銭坪の活動の基本となった。

銭坪のもう一つの特徴は、尾崎さんという「個人」を入口として、銭坪および隣接する浜集落という「地域」との関係づくりへと学生自身が活動の一つ一つ手探りで進めていったことにある。1年目に実施したガードレール磨きはその後も毎年継続し、「今年も来たんかね」「暑いのにご苦労さん」と声を掛けられる、地域への挨拶代わりに活動となった。3年目以降は、浜集落にも範囲を拡げ、銭坪・浜の全世帯(約40世帯)を一軒一軒訪問し、交流と関係づくりをすすめた。活動最終日に地区の第四集会所で開催した「お世話になりましたパーティ」には、銭坪と浜から19人の方々が参加して下さった。以上の他に、銭坪にキャンプにきた小中学生との交流、南宇和ライオンズクラブの行事への参加や長洲での農業体験、地元のウバメカシや竹を使ったドラム缶炭焼きなどを実施した。

【外泊(そとまり)】

平成28年度は、銭坪集落と外泊集落の二か所に分かれてサービ斯拉ーニングとなった。外泊は、海に面した急斜面に、海風から家々を守る石垣と石積みの段々畑が拡がり、「石垣の里」として知られている。かつての半農半漁を軸とした暮らしは今では成り立たなくなり、地域外に仕事を求めるか、民宿経営や年金で暮らしを立てる世帯が多い。現在、約40世帯(約80人)からなるという。

期間中は、外泊から徒歩で20分ほどの内泊集落内にある、愛媛大学南予水産研究センターの研究拠点「うみらいく愛南」に寝泊まりしながら、活動を進めた。「うみらいく愛南」は、廃校となった西浦小学校を活用した施設である。外泊では、集落の全世帯への挨拶まわり、地域の地蔵盆への参加、石積み体験、愛媛県立南宇和高等学校との協働イベント、活動成果報告会などを実施した。



【銭坪】海と畑に囲まれた場所にテント設営



【銭坪】活動初日は、テント設営に始まる



【銭坪】当番を決め、毎回自炊。「同じ釜の」仲間に



【銭坪】恒例活動となったガードレール磨き



【銭坪】ドラム缶をつかった炭焼き



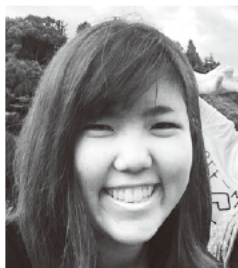
【銭坪】尾崎さん(前列左から2番目)



【外泊】家の囲む石垣



【外泊】南宇和高校の生徒と石積み体験



2年間SUIJIに参加して

愛媛大学 農学部 生物資源学科 地域環境工学コース
鶴見 茉由
愛南(銭坪)サイト(平成27年度、平成28年度参加)

私がこの国内SLに参加した動機は、海外SLに参加して新興国を見たいからであった。しかし、実際はこの国内SLは海外に行くための経験ではなく、自分自身の経験の一つとして非常に濃いものとなった。サイト内では、平成27年度ベーシック、平成28年度アドバンスドとして関わり方によって違ったことを考えさせられた。ベーシックとしての参加では、初めて外国人と共同生活を送ることがまずとても新鮮であり、お互いの文化や言語の違いについて学ぶことができた。また、農村地域に入ることも初めてであり、地域の人とだんだん距離を縮めていくことが楽しく、自分のコミュニケーション能力を高めることに繋がった。アドバンスドとしての参加では、ベーシックをサポートしながら、様々なことに目を向けなければならず、グループとして活動することの大変さにとっても気づかされた。地域の人へのアプローチはベーシックの時に私は学べたのだが、それをアドバンスドになってベーシックの人達と同じように学んでもらいたいという目標はなかなかうまくいかなかった。国内SLでは、地域の人との関わりはもちろん、グループ内でのコミュニケーションがいかに大切であるということをとっても考えさせられた。2回の参加を通して、一つの地域に違ったアプローチをすることでサイト期間内に目標へたどり着けなかったとしても、それまでの方法や過程をグループで議論しあえるという経験を得られたことは私にとって良い学びとなった。



生まれ故郷島根を想って

愛媛大学 農学部 生物資源学科 資源・環境政策学コース
山本 樹
愛南(銭坪)サイト(平成26年度、平成27年度)

「自分の生まれ育った地元・島根県的美保関町を何とかしたい」という思いが強かった。海、山に囲まれた景色。交通の便の悪さ、人の歩いていない道路。銭坪を初めて訪ねた時にこれが地元の将来だと直感した。地元がこうならないために、ある意味反面教師として銭坪を選んだ。地元に近い環境で背景の異なる様々なメンバーと共に、むらと人と真剣に向かい合うことができるまたとない機会だと参加を決めた。

銭坪は私が初めてしっかり向き合った過疎地域だった。教科書でしか見たことのない「過疎」が、自分の目で見て実感できたのは驚きでもあり、喜びでもあった。活動の中で特に印象に残っているのが「10年後銭坪がどうなっているか」という問いかけ。考えて、考えて、考えて、今もお答えがでていないこの問いが今後も宿題として私の中に残っていくのだろうと思う。

活動中は地元そっちのけで、銭坪で何ができるのかばかり考えていた。今も銭坪に行きたいとは思っているし、何か恩返しをしなきゃという思いはあるが、やっぱり生まれ育った地元が廃れていくのは見たくない。

もともと地方には何もないからよくないというように思っていた。SUIJIを通じてたくさんの観点・視点を学んだ。そうすると意外と身の回りは資源だらけ?と思うようになってきた。今まで通り過ぎてしまっていたものに気づけるようになってきているので、これから地元・島根でどんな宝物を見つけられるか楽しみにしている。それに、SUIJIを通じて知り合ったパワフルなメンバーがこれからどこでどんな活躍をするのか楽しみでしょうがない!

忘れられないむらや人と出会えた、それが私にとってのSUIJI-SLPだ。



未来を託す若者たちへ

庄本産業株式会社 会長 尾崎 功一
愛南町・薬草栽培 代表

大学は銭坪で何をしようとしているのか、はじめはさっぱりわからなかった。どういう形で役に立てばいいか、ずいぶんと考えた。パンフレットや報告書を読んで、疲弊した地域をなんとかしようとする学問だと思った。銭坪に来て観察して、この村をよくするにはどうしたらいいのか、具体策をだす活動をするのだろうと思ったが、実際の活動はそれとは少しずれているような気がした。学生たちはその日を過ごす(食事、洗濯、掃除など)ために多くの時間を費やしていた。たとえ目的とずれていたとしても、学生たちは将来にとってかけがえのないものを得たのではないかと思う。暮らしの原点、家族、生きることを学ぶということだ。大学では学べないことを学ぶには銭坪はよい場所だと思う。

インドネシア人も日本人も私にとって区別はなかった。受け入れて感じたのは、日本人よりもインドネシア人のほうが学ぶ意欲が強いことだ。インドネシア人は自分のためよりも、家族のを考えているのではない。だから意欲も意識も高い。言葉が通じるどうかは関係ない。多く質問するのはいつもインドネシア人だった。そういう違いに気づいていた日本の学生には、よい学びになったと思う。国際交流、学びあい。いい方向に導けば、相当のものを生み出せると思った。学生たちは、毎日夜遅くまで英語によるミーティング、課題に取り組んでいた。敬意を表したい。

銭坪にとってどんな意味があったか。学生の活動に興味を持ち、深い関心があったことは確かだ。悪く思った人はいない。ただ、活動成果で村に何が残せたかは明確ではないと思う。2週間程度で積み重ねてきた歴史や現状は変わらない。今の疲弊した状態では地域の側も受け入れに戸惑い、器量に乏しい。学生の側もそれに対してどうしたらよいか、考えられないほどに現状は厳しく、ハードルは高い。当たらず触らずの遠慮がちだったのが残念に思うが、その気持ちも理解できる。村人と学生の距離がうまり始めたと思ったら、2週間が終わっている。期間が短い。今からというときに帰ってしまう。

いつも考えていたのは、村人にも学生にも感動を味わってほしいということだ。景色でもなんでもいい。感動すると学ぶことが見えてくる。感動するには絆が必要だ。村づくりとは絆づくりかもしれない。これは学生たちから学んだことだ。学生たちに知り合っていなければ、こんなことは思いも想像することもなかった。農地は山になり、自然が迫ってくる現状にどう向き合うか。学生たちの宝探しヒントになった。Uターンして10年。生まれた故郷を世界一よいところにした、という思いでやってきた。毎年、私をその初心に返してくれた学生たちに感謝したい。

村をよくするのは村の者にしかできない。他人は何もやってはくれない。ただし、きっかけをつくるのは外部の者かもしれない。村の者は住んでいるがゆえに自分の地域のよさも悪さもわからない。村の間には損得がある。学生には損得がない。それが学生の強みだ。それをもっと生かせればよかったと思う。

私は17歳の時に大阪に出て、一日も早く技術を身に付けようと、とにかく働いて10年で会社を興した。学生に伝えたいのは、もっとハングリーになれ、ということ。18、19歳になって自分が人生でやりたいことがわからん状態ではSUIJIどころではない。自分のやるべきことを早く見定めて、原点を見失わず、大学で学ぶことを財産に、ぶれない生き方をしてほしい。

SUIJIのユニークなところは、四国とインドネシアの6つの大学から、学部も文化も言葉も食べるものも違う学生が集まることだろう。お互い初対面という学生たちが、知らない土地である銭坪にきて、村人に出会う。自炊もテント生活もはじめて。すべてが初めてという環境の中で2週間で帰る頃には、全員が一体感がある。村人に少なくともインパクトを与えて、親しくなっている。「今年の学生は大丈夫かいな」と思うこともあったが、帰る頃には遅くなっていた。イマドキの若者は…、と嘆く向きもあるが、SUIJIの学生たちの活動をみていたら、これからの日本も大丈夫だな、と思えてくる。

私自身は、毎日感動していた。この年になってものすごい学びになったと思う。学生たちにとっては、生涯忘れることのできない経験になるだろう。日本の国もこういうことをやらないと、学生は成長しないと思う。

(平成28年11月16日インタビュー、聞き手：小林修・島上宗子)

こもぶち 蔦淵サイト

蔦淵は愛媛県宇和島市西部に位置し、宇和海に突き出た半島の先端部に位置し、宇和島市街中心部から約35キロの距離に位置する。7つの集落、高助、横浦、宮市、豊之浦、宿之浦、大島、矢ヶ浜に分かれており、多くの人々が生活しているのは、高助と本浦(横浦、宮市、豊之浦、宿之浦の4つをまとめた総称のこと)である。国内SLでは宮市にある蔦淵公民館が活動の拠点となった。



主な産業は魚や真珠の養殖業である。はまち、かんぱち、鯛などの魚はまだ価格的にも苦しい状況であるが、真珠の養殖は、中国などからの需要が増えたこと、また、三重などの有名な真珠の産地の後継者不足により供給が減少したことにより、近年経済が上向きとなっている。かつては、麦や芋、みかんなどが作られており、山一面が段々畑であったが、現在は木が生い茂り、手入れされていないため、農業は行われていない。理由としては、昔は半農半漁であったが、漁業に力を入れ、徐々に農業から撤退していったことがあげられる。現在は、多くの人々が対外的に売り出すためではなく、家庭菜園として芋や野菜などを育てている。

人口は339人であり、そのうち約70%以上が60歳以上で、高齢化が進んだ地域である(平成29年2月現在)。また、小学校全校生徒は27年度より3人増え、平成28年度は11人である。しかし、27年度末に保育園が閉園となり、現在教育機関は小学校のみである。

医療機関として診療所が1つ存在するが、常駐の医師はおらず、隣接する地域と午前午後や曜日によって行き来している医師がいるのみである。また、耳鼻科、眼科などの専門的な診察ができないため、宇和島市街地まで通う人も多い。

国内SLでの活動は大きく二つに分けられる。毎年実施した活動と、学生が蔦淵についてより学び、蔦淵の人々が学生は何ができるかをより理解したことから生まれた活動である。

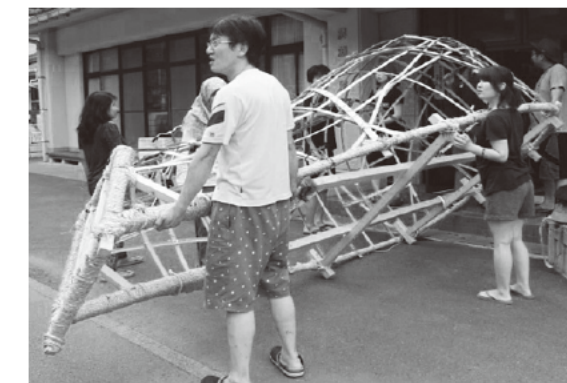
毎年実施した活動の主なものには「コモカフェ」の開催がある。学生たちは蔦淵の一人でも多くの人々と知り合うために軒一軒チラシを配り、招待していった。人々は学生たちが準備したインドネシアと日本の料理を楽しんだ。4年目ともなると、「コモカフェ」を待ち遠しく思いはじめる人もいたようだ。また、学生たちは地元の寺での盂蘭盆おどりに参加し、子供たちと遊び、海で泳ぎ、期間の最後には、活動をサポートしてくださった方々を招いて感謝パーティーを開き、活動報告を行った。

その年ごとに生まれた活動には、荒地の清掃、海岸の清掃、小学校の生徒を対象とした海の環境教育プログラムづくり、地元料理や魚のさばき方講習会、海藻を育てるための仕掛けづくり、蔦淵の歌の作曲と披露などがある。

活動を通じて蓄積された知識は毎年受け継がれ、4年を経て、学生たちは村人により親しくなり、蔦淵に関する理解も深まった。毎年、外部者を村に受け入れることで、村人は外部者に対してよりリラックスし、オープンになっていった。こうしたプログラムの村へのインパクトを測ることは難しいが、外部者に対する村人の態度を変化させたということはあるだろう。



道路わきに茂ったヨセの伐採作業(平成27年度)



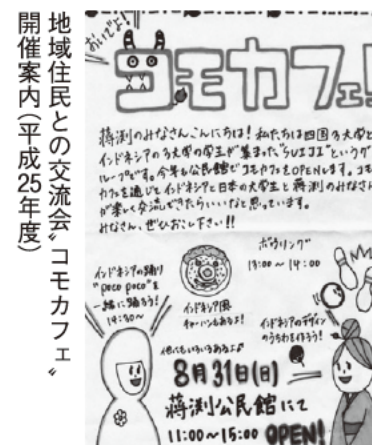
地域祭用の牛鬼の制作(平成27年度)



子供たちに海教育(平成27年度)



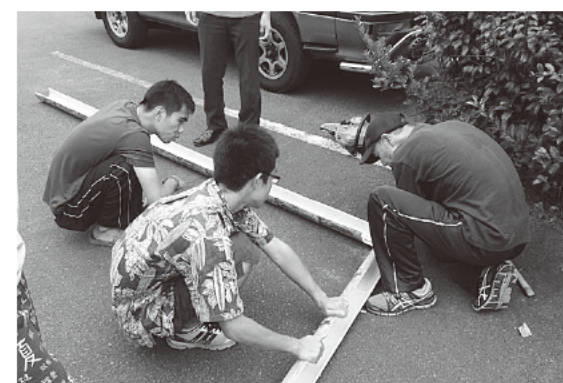
郷土料理指導を受ける(平成27年)



地域住民との交流会「コモカフェ」開催案内(平成25年度)



目の前の海で獲れた真鯛と牡蠣



交流会での流しそうめんの準備(平成28年度)



「コモカフェ」にて地域の方と(平成26年度)



蔭淵の方々の笑顔

愛媛大学 理学部 物理学科 宇宙物理学コース

石田 鮎美

蔭淵サイト(平成27年度、平成28年度)

私は星に興味があり、「田舎に行くとき綺麗な星空が見れるかな」と思い参加した。

サイトで一番印象に残ったことは、地域の方々の笑顔である。その中でも一番印象に残っているのは、蔭淵で2番目に年長のおばあちゃんの笑顔である。実習の最終日に私はお世話になった地域の方々の家にあいさつ回りをした。その際、そのおばあちゃんの家で話すこととなった。昔はよかった、こんなことがあった、と嬉しそうに笑顔で話し、反対に今は不便だと悲しそうに言っていたおばあちゃんに私は、「不便なら蔭淵から出ていかなの？」と質問した。その時、そのおばあちゃんは、「ここを出て行って娘と暮らすって話はあるけど、なんだかんだ言って蔭淵が好きやからな」と今までで一番の笑顔を見せてくれた。あの笑顔は今でも忘れられないほどとても優しい笑顔であった。思い返せば、不平不満をたくさん言う地域の方も、最終的には笑顔で蔭淵の自慢をしたり、好きだと言っていた。そんなシャイな人がたくさんいる蔭淵が私は大好きだ。

SUIJIの活動を通して、私は様々な方々と関わり、多くの体験をさせてもらった。その中で、自分を見つめ直し、自分はこれからどう生きたいのか何を大切にしたいのかが見つかった。また、自分から動かないと何も始まらないということも学んだ。これからの人生、多くのことを経験する中でやりたいことは変わっていくかもしれないが、この活動の中で考え大切だと感じたことは変えずに軸として持ち続けたい。そんな大切なことを見いださせてくれる活動であった。



SUIJIから得たもの

愛媛大学 農学部 生物資源学科 生物生産システム学コース

清水 茜

蔭淵サイト(平成26年度、平成27年度)

地域未来創成入門を受けた動機は、「なんとなく面白そう」だった。元々地域おこしに興味があるわけではなかった。しかし、地域未来創成入門で行った蔭淵で、地域の方々と話したり、地域を探検したりするうちに、この地域が好きになった。蔭淵についてもっと知りたい、もっといろんな人と交流したいとの思いから、夏の国内SLへの参加を決めた。

サイトで活動して一番うれしかったことは、「地域の方が自分を覚えてくれたこと」だ。私たちを実習の期間中覚えてもらうのは簡単かもしれないが、それ終わってすぐ忘れられたのでは意味がない。忘れられるということは、その地域で私たちが行った活動も忘れられるということだからだ。「そういえば去年、あんな子がいたなあ。」それくらいでいいから、地域の方に覚えてもらえると、それだけその地域と地域の方の心に入っていたのかなと思える。自分を覚えてもらうことは、地域を変えるための第一歩だと思う。

私は国内SLにアドバンストとして参加した際、ベーシックの学生には楽しんでもらいたいと考えた。もちろんまじめにやる部分もあったが、それ以外の部分は存分に楽しめるよう配慮した。その結果、最後は自分を含め、みんなが楽しめるものになった。さらにその年の活動も、前年より濃厚な内容のものとなった。みんなが意欲的に活動できたことが、この結果につながったのだと思う。

以上の経験から、私は何事にも楽しめるように努力したいと考えるようになった。楽しむことが成果を上げることやモチベーションアップにつながる人が多いということを実感したからだ。私は将来社会に出たとしても、このことを意識し続けていきたいと思う。



SUIJIからのプレゼント

企業組合こもねっと 事務局長 清家 裕二

企業組合こもねっとは、参加者のみなさんと蔭淵地区の方々をつなぐことで、大きな3つのものを得ることが出来ました。

一つ目、蔭淵地区の方々の特技や人柄の情報。

皆さんに様々な体験をして頂くため、多くの地区の方に協力を依頼しました。

その結果、予想以上に色々な人が様々な能力・特技を持っていることを知ることが出来ました。

また、地区の方々も地区外の人を受け入れる楽しさを感じてもらい、更なる能力に目覚めてもらったことも大収穫です。

二つ目、大学についての情報。

「サーバントリーダー・ESD等の言葉や概念」「地域との連携を大切にしていこうとしていること」「教育プログラムづくりの大変さ」等、大学の一端を知ることが出来ました。さらに、私たちでも連携できたことが自信となり、今後の活動の可能性が広がったと感じています。

三つ目、大学生の考え方の情報。

「大学では遊んで、大学卒業後、いい会社に入って、だけでなく、本当に自分たちが何者であるかを知ろうとしていること。」「社会貢献もしたい」「海外への興味」など、大学生の考え方を知ることが出来ました。

裏返せば、このようなことを理解した上で受け入れることができれば、もっと素晴らしい経験を参加者のみなさんと共有できたであろうと思うことです。

語り尽くせませんが、SUIJIの期間以外にも蔭淵を訪れてくれたり、SNSでつながっていることは本当に嬉しく思っています。

来年度から形を変えての活動になるとのことですが、これまで以上にお互いに成長できる体験となるように努力しています。

未来を担う若者達へ

蔭淵公民館長 中島 伸義

大学生のみなさん、過去に当地で過ごした晩夏は如何だったでしょうか？また今夏過ごそうとしているみなさん楽しみにお待ちしております。

長年にわたったこのプログラムも残り僅か、既に巣立っていった仲間達は経験を生かして様々な分野で活躍をしている事でしょう。

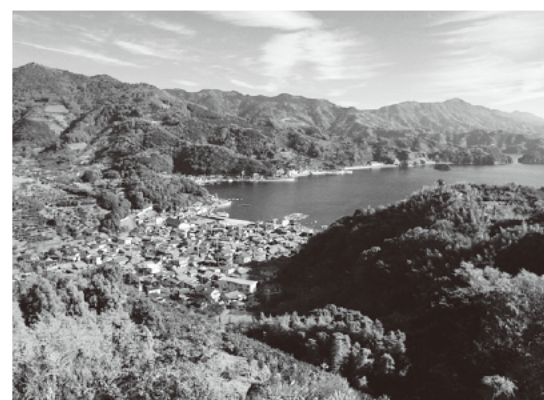
ただ、私を含めた地域の住民がSUIJIの目的を十分に理解出来ていなかったため、スムーズな援助が出来なかった事、折角取り組んでいた事業に対してそれを維持出来なかった事等、誠に申し訳なく思っています。

残り少ない期間となりましたが、今後も楽しい交流が出来たらと思っています。ただひとつだけお願いがあります。時間は守るようにしてね！地域の方もいろいろ予定があるのだから。



あけはま 明浜サイト

西予市は愛媛県の南予地域のほぼ中央に所在し、高知県との県境から宇和海まで東西に長い形状をしている。高知県境に接する山間部と海岸部の標高差が約1,400mあり、宇和盆地から山間部にかけて冬季に積雪がある一方、海岸部は年間を通して比較的温暖である。多様な気候条件に応じて第一次産業が発達し、山間部では畜産や野菜、平野部および盆地では米、海岸部では柑橘と養殖・漁獲による漁業が行われている。平成28年11月末現在の人口は39,818人であり、市全体では人口減少が進んでいる。



明浜町は、西予市役所から自動車約20分の距離にある漁村地域である。西予市東部のリアス式海岸に沿って位置し、東西に長い形状をしており平地が乏しい。大正期から第二次世界大戦後にかけて石灰業が隆盛をきわめた以外は、近代から現代に至る間に大きな産業は存在しない。それ以前は長らく半農半漁の生活が成立していたが、1950年代後半にカタクチイワシの漁獲量が大幅に減少し、チリメン漁、真珠養殖、小規模な養殖漁業に転換した。また、同時期には南向きの海に面した斜面を利用した柑橘栽培も導入された。



明浜町全体で地元の方への聞き取り調査



耕作放棄地を開墾して畑に



狩江小学校との交流でインドネシアの踊りを披露



渡江での水路掃除

【渡江での活動開始】

平成25年より明浜町狩江地区の渡江において活動を始めた。渡江は人口230人（平成25年6月1日現在）の漁業と柑橘業を営む沿岸部の集落であり、当時は女性グループ「美〜んず」や自治会長をはじめとした住民と関わりつつ活動を組み立てた。

まず、明浜町自体への訪問が初めてであったため、渡江を含む全地区を分担して踏査した。ここで石灰業、漁業、柑橘業、伝統芸能である文楽など、町の特徴を把握した。続いて、住民が日頃から抱えている課題の解決や実現したいことを支援することとし、溝掃除、植栽木の伐採、畑の開墾、小学校との交流などを行った。これによって住民との連携が促進され、翌年の活動の基盤をつくるに至った。

平成26年は前年の活動を引き継ぎつつ、学生が独自の活動企画を模索した。その結果、SNSを活用して渡江の子ども達に勉強を教える「赤ペン先生」や、冬期の農繁期に柑橘類の収穫を手伝う「ボラバイト」など、活動期間以外の関わりも持つようになった。



みかん摘果作業をお手伝い



ヒラメ養殖の餌やり

【狩江への広域展開】

平成27年は期間外の関わりをより密接に展開すると同時に、隣接する狩浜でも活動を行うこととした。活動範囲を広げたことにより、狩江地区（狩浜・渡江を合わせ、平成25年6月1日現在の人口850人）全体での関係性を深めていくこととなった。さらに、平成28年には、これまで渡江集会所のみであった拠点を渡江と狩江の2カ所に分け、学生もそれぞれの場所での担当を決めて活動に取り組んだ。

【サービスラーニング後の地域との関係】

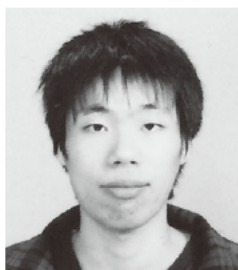
4年間にわたるサービスラーニングでは、滞在中の活動に重きを置きつつも、それ以外の期間に地域住民と積極的に関わる重要性を知った。現在は、「赤ペン先生」や「ボラバイト」を中心に、道路清掃や祭りに参加するなど、学生と住民の間で自発的な関係の深化が起こっている。



空き家を片付けながら活用策を考える



山道の整備は活動期間後も自発的に参加



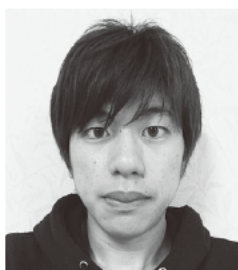
能力の先

愛媛大学 農学部 生物資源学科 生物生産システム学コース
土田 恵輔
明浜サイト(平成28年度)

私は、平成27年度国内SLに香川県小豆島サイトのベーシックとして参加したが、実習期間中の活動だけになってしまい、県を越えなければいけないというのが壁となりその後の活動が出来ておらず、後悔を抱き、平成28年度の国内SLは愛媛県明浜サイトを希望した。

アドバンスドになる学生の多くはベーシック時と同じサイトを選ぶため、既に地域の人とつながりを持っているのだが、私の場合は、つながりを持っておらず、サイト活動が始まる事前に先輩方の力添えを得て、地域の人々と顔なじみになるために、明浜に何度も足を運ぶ必要があったのである。また、明浜サイトはアドバンスドが私1人しかいなかったが、明浜の渡江地区と狩浜地区に分かれる判断をしたため、片方はベーシックのみで活動を行うこととなり、アドバンスドとして、何をすべきで、何を言わなければいけないのかを何度もサイト期間中に考えさせられた。

先述したように、1つの大学の、1つの集中講義の、1つのサイトの、ある年度の、1つの地区で動いた、小さなリーダーとして、自分のできる範囲を知ることができ、それを苦しくとも広げることへの糧になった。また、授業が終わった後も地域とともに活動を続けたいという想いから、当初たてた「つながりの継続」という目的を、明浜の名産のミカンの収穫を手伝いに行くことで、果たすことができ、尚且つ柑橘を専門で研究していきたいと思っている私の後学にも役立つのであろう。



地域の声

愛媛大学 農学部 生物資源学科 応用生命化学コース
山崎 翔悟
明浜サイト(平成26年度、平成27年度)

私の明浜サイトでの2年間は大学構内では学ぶことのできない貴重な体験だった。なぜなら実際に暮らす方の所へ訪問しお話しをすることで、外から見ただけでは分からない地域の根っこの部分を学ぶことができたからだ。農家さんの現状や明浜の未来の話を、ホームステイや交流会、時には実際に農家さんの仕事を体験しながら聞くことが出来た。明浜に住むみかん農家さんやおじいちゃん、おばあちゃんの一言一言が「明浜」という町を浮き彫りにしていくように感じ、地域に入る意味を感じた。そんな明浜の方の言葉の中でも心の中に印象深く残っているのが、「みかん山は10年後には無くなるやろなあ。」という言葉だ。最初に話したときは笑顔ばかりだった地域の方の顔が、徐々に真剣な顔になり、地域の未来について話して下さる姿を見て、地域の方とお話しをする重要さや重み、さらに私たち学生に何ができるだろうかといった責任も感じた。明浜の方の生の声を聴くことができ、SUIJIに参加した意味があったと思った。

明浜の方は、私が明浜を訪れるたびに、「また来たか！もう明浜の人やなあ！」と大きな声で話しかけてくれる。私は学生を喜んで受け入れて下さる明浜の方の人間性が大好きだ。これからも農家さんのみかん狩りのお手伝いに通い続けて、少しでも農家さんの力になりたいと考えている。

サービス・ラーニングについて狩江のみなさんに聞きました

SUIJIの学生達が来て、地区は賑やかになった。元気になるよ。地区で何かをしようとするきっかけになっている。「今度、学生達が来るからやろうや」という具合に。

今年の夏に来た時に、外国語の機械を動かすために一生懸命やってもらった。その前向きな姿勢がとても素晴らしくて、自分達も頑張らないかんと思った。

夏に来て終わりじゃない。そこからのつながりが大事。夏に初めて来て、その後もよく来てくれて、道づくりや祭りにも参加してもらった。道づくりはこれから地区の住民だけではできなくなるので、外部との連携が必要という話が出ている。これからも良い関係性を持ち続けていきたい。

「明日、ケイらがボラバイトで来るって言いよったよ」

住民と一緒に何かをするのはいいけれど、自分達でできることを企画してほしい。提案してくれるのはいいが、それは誰がやるのかとなったら後が続かないことも多い。受け入れるのも大変。ボラバイトを企画してくれたけど、一人前の力はない。食事や寝るところの世話など、忙しい時期に手間がかかってしまう。来る学生がある程度の人数なら集会所で寝泊まりしてもらってもいいが、1人か2人だとそうもいかない。せっかく段取りをしたのに、直前にキャンセルや人数変更があると大変。ボラバイトとはいえ、わずかでもお金を払っているのだから、ある程度のことはやってほしい。

「高川に行きよったもゆちゃん、高川に住む言うとりらしいね。」

あんな子がうちにもおったらええなあ。」

お話しいただいた人：浜木由規雄さん、大早稔さん、佐藤吉彦さん、今市貴信さん

たかがわ 高川サイト

西予市城川町高川地区は、市中心部から34km、城川町中心部からは5km離れており、高知県境に接し、九十九曲峠を越えて脱藩してきた坂本龍馬が通過したと言われている。肱川流域にあって河口から最奥部に位置し、12,247km²の広がりを持つ山村で、標高の最低点と最高点の差は約750mあることから、地区内で気温や降雪の状況が異なる。地区内には大門峠を挟んで高野子と川津南の2つの藩政村の区分が残っている。

一時的に小学生の数が微増した時期はあるが、全体的には人口減少が続いている。平成28年4月1日現在の人口は576人であり、最も人口が多かった1952年の1,990人と比べると3割弱に減少している。

地区の主要産業は農業である。「2010年世界農林業センサス」によると、田7ha、畑30ha、樹園地42haで、畑は出荷用のトマトと自家用野菜、樹園地ではクリとユズが栽培されている。他に、飼育数100頭を超える県内でも大規模な酪農家が1軒、養鶏場が1軒存在する。



【住民の課題解決からのスタート】

高川サイトでは平成26年より活動を開始した。地域づくりを行っている「高川地域づくり会」がパートナーとなり、活動の内容のすりあわせや企画を行った。具体的には、水道の水源設備の掃除、キャベツの植栽、飼料の刈り取り、こんにゃく畑の草取りなど、住民の要望をまとめつつ、これに対応していった。その際に、本会のサポーターとして位置づけられている市役所職員7名が調整役となり、住民への照会、各種作業の段取り、報告会の呼びかけなどを担った。

【地域課題を住民と一緒に考える】

高川地区では、当初から定住促進が地域の最重要課題となっていた。平成27年はこれが具体的にありつつある年であったため、前年の活動を継承しつつ、定住についても検討・実践していくこととした。その一環として、空き家を改装した一時居住の物件「お試し住宅」の検証を活動に盛り込んだ。学生は「お試し住宅」予定物件に泊まり、必要な機能や設備は何か、どのようにすれば高川地区に住みたいと思えるのか、住民はどのような人を迎えるべきなのかについて提案した。この動きは、活動期間外にも続けられ、定住のためのワークショップへの参加、「お試し住宅」のリフォームの手伝いにもつながっていく。

【定住促進への集中】

平成28年は、「お試し住宅」が完成して入居者を募集している時期であった。そこで、農作業支援などの割合を減らし、ホームステイによる高川地区暮らしの実体験と明示、「お試し住宅」の活用促進策の提案などに活動を集中させた。この年は、「高川の住民になる」をスローガンに活動を展開している。



乳牛の飼料刈り取り



住民総出で小学校の校庭の除草



ひたすら眠る... 力仕事の合間の昼休み



高齢者向け移動販売のお手伝い



社会人受講生と一緒に地元学



定住お試し住宅に滞在して議論



原木市場で林業について学ぶ



ホームステイ先と涙のお別れ



全員で第三の案を

愛媛大学 農学部 生物資源学科 施設生産システム学コース

小幡 圭悟

高川サイト(平成27年度、平成28年度)

私がSUIJI国内サービ斯拉ーニングに参加した動機は、インドネシア人や学部が違う人、年代の異なる人(地域の方)との交流を通じて多様な視点を身に付けたいと思ったからだ。また今まで自分が苦手と感じていたこと、自分が今までやったことのないことに挑戦したかったことも理由の1つである。

サイト活動で一番印象に残ったことは、同じ問題に対する考え方や捉え方がインドネシア人との間だけでなく日本学生の間でも大きく異なっていたことだ。

SUIJIに参加したことでこの場でしか出会えないような様々な人に出会うことができた。その人たちは全員違う半生を送ってきており、その過程で培われた考え方が違うということをもっと知ることが出来た。そのため、人と話すときに、まず相手はどう思いどう考えているのか、どんな人なのか知りたいという気持ちを持つようになり、コミュニケーションに少し自信を持つことが出来るようになった。ベーシックの時に初めて外国人と交流し、文化の違いを肌で感じ、もっと話したいという気持ちから英語を継続的に勉強するようになった。アドバンスドの時はリーダーとして、メンバー、先生方、地域の方々の意向を理解することの難しさを感じた。またそれらをすり合わせ、学生の意見の強硬ではなく、妥協でもない第三の案を提案することは非常に難しいことであることを知ることが出来た。自分でも答えがわからない問題を議論しメンバーを信頼し任せることは自分の中で確かな柱が必要だと強く感じた。



SUIJIから、高川から得た学び、経験、成長

愛媛大学 法文学部 総合政策学科 司法履修コース

蛭田 靖子

高川サイト(平成27年度、平成28年度)

参加した動機は地域や地域の方と関わり、この活動を通して机上の勉強だけでは得られないものを見つけたいと考えていた。また、インドネシアの学生を含め他大学の学生と協働することによって自分自身のスキル向上を期待して参加した。

サイトで一番印象に残ったことは、高川のコミュニティの強さに驚いたことである。高川の地域の良さは「人」と感じられる。行事があれば子供から大人まで多くの人が集まり、世代間の交流も見られる。高川の人々は高川の将来や地域での取り組みについてそれぞれが強い思い、考えを持っておられる。そして、誰かが何かをやりたいと言いついた時には、一緒に活動してくれる人がいるようだ。高川のコミュニティの強さは他の地域では見られないことではないかと考える。サイトでの活動で地域から学んだことは、空き家の活用に関する議論において、他の地域で成功している方法が高川でもベストな方法とは限らず、高川という地域、人を知っていくにつれ、地域の個性、強みを活かしたアプローチ、解決策を考えることの重要性を学んだ。

SUIJI国内サービ斯拉ーニングを振り返って、自分自身の成長を含め、変化が多くあったと考える。一番の変化は関心が増えたことである。それによって吸収できることが増え、自分自身の行動にもつながり、そこから発見する新たな気付きに出会う機会が増えた。SUIJIに参加したことはそれまでは見えていなかったものに気付くきっかけを与えてくれた意味を持つと考える。また、SUIJIでの活動経験を活かすという点において、その活動経験が軸となって多方面に派生し、大学での活動や地域とつながり続ける活動等の選択肢に出会うことにつながり、そこでの経験がさらに新たな成長、学びへとつなげていくことができると考える。

「高川の魅力を学生が語ってくれるのは心強いです」

西予市高川公民館主事 宇都宮雅己

サービ斯拉ーニングの活動は、年々レベルが上がってきていると感じます。1年目の滞在の時は、農業や集落の水源掃除などのきつい作業ばかりでした。2年目は地区の子どもの連携をうまく取ってくれて、住民さんとより触れ合えた年でした。3年目は空き家の利用を中心とした定住について集中的に考えてくれました。

サービ斯拉ーニングを通して関わりが強くなる学生もあれば、そうでない学生もいます。住民さんと直接連絡を取り合い、地区の活動があると頻繁に来てくれることもあれば、夏に来てから一度も連絡がないこともあります。年によっては他の年より見劣りすることもあります。関係が強くなったり弱くなったりするのは仕方ないことかもしれません。それも含めての交流が続くと良いと思います。

サービ斯拉ーニングの滞在期間中に関わりを持つだけでなく、その後の活動にもつながっていくと地元としてはありがたいです。数年前から、お祭りや運動会などの行事がある度にに来てもらい、地区と学生の絆が深まってきています。ちょうど今も、移住フェアのために東京へ行ってもらっている学生がいます。外の視線を持ちながら住民さんと一緒になって、東京で高川に移住してくれる人を募集してくれています。高川の魅力を学生が語ってくれるのは心強いです。

移住については、空き家を改修した1年間家賃無料の「お試し住宅」になかなか人が入らない状態です。急ぐよりは焦らずに良い人を吟味して入れたいと思っており、会長も同意見です。そのうち学生が住んでくれてもいいと思います。例えば、サービ斯拉ーニングで来てくれた学生が西予市内で就職してくれ、定住もしてくれて、何かの関わりを持ち続けられたら嬉しいです。その時には是非とも高川公民館に来て地域を担ってほしいと考えています。



しょうどしま ■小豆島サイト

瀬戸内海に浮かぶ2番目に大きい「オリーブの島」小豆島にサイトはある。学生が活動するのは小豆島町中山地区である。小豆島町は、人口14,585人、世帯数は6,384で（2016年12月1日現在/小豆島町ホームページより）、中山地区の人口は362人、世帯数は141である。小豆島町の主な産業は、水稲栽培、電照菊、アスパラ、イチゴなどの農業と、醤油、そうめん、佃煮などの商品製造業、そして観光業などである。



中山地域は標高差100m間に広がる約800枚の棚田、島の重要な水系「殿川」など、日本の原風景が残されている里山である。夏は、棚田が緑に輝き、風香り、水のせせらぎが聞こえ、訪れるたび心が洗われる。ここも少子高齢化の波が押し寄せてはいるが、地域の方々は全国棚田百選「中山の棚田」を始め、歴史的伝統行事である7月の「虫送り」、10月の「農村歌舞伎」を守り、次代へ引き継ぐべく協力し、誇りを持って生き生きと企画運営に勤まれている。また、3年ごとの瀬戸内国際芸術祭では海外の芸術家が、地元の協力を得て地域の材料を使った作品を制作展示し、日本全国・世界中から観光客がやってくる。

こうした中山地域に学び、地域の維持発展に貢献したいと、小豆島町企画振興部農林水産課にプログラム受け入れをお願いし、町長には「棚田保全活動」と位置づけていただき、中山棚田協議会、また、中山農村歌舞伎保存会と連携して4年間活動を続けてきた。

サービスラーニングでは、香川大学経済学部長 原先生、農学部 諸隈先生、インターナショナルオフィス 細田先生に講義・演習実施でご協力をいただいた。サイト内での主な活動は、地域交流会、醤油・素麺製造所見学、棚田稲刈り作業、歌舞伎舞台見学、県立小豆島高等学校交流会、オリーブ公園見学・除草・害虫防除、瀬戸内国際芸術祭中山での観光客接待、中山観光マップ・フォトブック・中山農村歌舞伎YouTube作成等である。

初年度の国内SL成果発表会では、前自治会長岡田繁實様（故人）に「一番良い棚田を貸してあげるから、お米を作りなさい。」と助言いただき、その後、香川大学農学部学生プロジェクト「棚田の会」が発足した。今では50人余りの学生が活動し、棚田での米作り、年間行事への参加・手伝い、農学部収穫祭では参加者へ棚田米のもち・赤飯を振舞い、中山の広報を担っている。また、2016年10月には、地域の方たちが総出で作り上げる中山農村歌舞伎と、日本最古の芝居小屋金丸座での公演に学生2名が初めて出演した。

【小豆島町】

人口：14,975人 世帯数：6,587世帯（H27.7.1）
面積：95.63km² 高齢化率：40%（推計）
気候：瀬戸内海型気候で温暖少雨、年平均気温は15度前後
産業：農業（水稲栽培 電照菊アスパラ イチゴ）、
食品製造業（しょうゆ そうめん 佃煮）、観光業、
観光関連産業オリーブ製品

【中山地域】

人口：362人 世帯数：141世帯
標高差100mの間に広がる約800枚の棚田、島の重要な水系「殿川」、点在する民家で構成され、日本の原風景が残されている里山



収穫作業の手伝い(平成26年度)



まつもと農園で6次産業を調査



香川県立小豆島高等学校で文化交流(平成27年度)



香川大学農学部付属農場でとうふ作り



中山ふる里会館でもちつき体験(平成28年度)



インドネシア料理で交流会



中山農村歌舞伎化粧体験



自分を取り巻く人々と、自分自身をみつめる

香川大学 農学部 応用生物科学科 生物生産科学コース
富田 真澄

小豆島サイト(平成27年度、平成28年度)

私がSUIJIに参加しようと思ったのは、大学生のうちにはできないような、国外を視野に入れた活動をしたかったからだ。しかし、実際に国内での活動をしていくときに、今まで見てこなかったような現実を目の当たりにして、私たちがこの村の人々にどんなことができるのだろうかと考えようになってからは、プログラムに対する見方が変わった。

1回の活動だけではできることが少ないので、前年度までの内容を引き継いだ活動をするのが大切であると感じ、2年目も活動に参加した。村には都市部にはないような団結力があり、外の人に対して内向的になる傾向がある。それでも今までの先輩方が培ってきてくださった繋がりを大切にして、こちらから積極的にコンタクトを取ってみると、地元の人にもそれに応じてくれるようになったことが嬉しかった。活動を行うために一番重要なことは、地元の人とのコミュニケーションだと思っている。私たち外部の人間だけが動くのではできないことに限りがあるからだ。

小豆島サイトは村と協力してこれからも活動を展開していくことになっている。また、平成28年度の活動はこれまでに得てきた村についての情報を発信することを目的としたので、今後はその情報を見て訪れてくれた人を受け入れる体制づくりをしていってほしいと思う。

私はこのSUIJIプログラムを通してたくさんの人と関わることができた。それは自サイトのメンバーをはじめ地元の方々、他のサイトのメンバーなど、様々な出会いがあった。その人たちの数だけいろいろな考え方に触れ、自分の世界の狭さを感じた。自分自身を見直すきっかけをくれ、人とのつながりの大切さを教えてくれたSUIJIは私を大きく成長させてくれた。これは今後の大学生活、また社会に出てからも私の助けとなってくれるだろう。



小豆島サイトに訪れて

香川大学 農学部 応用生物科学科 生物生産科学コース
細谷 千恵

小豆島サイト(平成25年度)

私はSUIJIの初年度に参加し、小豆島サイトを選んだ。滞在先である小豆島町中山は、棚田の美しい景観が特徴的だが、近年は農家の高齢化による離農に伴い耕作放棄地が増加している地域である。初年度において、小豆島サイトの滞在期間は4日間であった。

中山に来て、やはり棚田の美しさに圧倒された。これが失われていくのは非常に残念なことだと思った。それは地域の方々も同じで、しかし、後継者不足でどうにもできないという様子だった。地域の方々とお話をして感じたのは私たちへの期待がかなり大きいということだ。この期待には必ず応えなければならなかった。そこで最終日、私たちの班は「香川大学と提携して田んぼをしませんか」と地域の方々にプレゼンをした。プレゼンの背景には前述の理由に加えて、棚田の美しさと地域の人々の温かさに触れ、4日間ではとても物足りなかった私個人の感情も大いに含まれている。これに対し、当時自治会長であった岡田会長が二つ返事で快く田んぼを貸してくださることになった。これが発端となり今でも香川大学では「棚田の会」が続いている。

SUIJIのテーマである「持続可能な発展」の遂行にはまだまだだが、SUIJIをきっかけとして中山は少し活気づいたのではないだろうか。学生もSUIJIを通して貴重な体験が得られ、自立心や現状突破力など様々な力が身についているだろう。今後も後輩のために、そして少しでも多くの地域のためにSUIJIのようなプログラムが発展していくことを願う。

若い感性と情熱を期待しています！

小豆島町中山地区自治会長 武田 政昭

傾斜地に貼り付いて生活しているような当地区を活動サイトに選んでいただき、農作業や村祭りのサポーターとして多大の支援をいただいています。また、毎年8月には稲刈り作業を手伝っていただき、ありがとうございます。

地区内の作業に入り込み内側から支えてくださるので、大変ありがたく思っております。最近では薄らいできましたけれども、農作業は助け合え、あるいは喜び合えることが特徴のひとつだと思っております。ところで、中山地区も他地区にもれず少子高齢化、産業生活構造の変化でコミュニティの存続、産業（そうめんなど）、行事、機能単位の活動組織などの存続が危ぶまれております。また、生活の糧にならなくなった畑や山林が放置され、鳥獣の格好の住処となって様々な被害に困っております。人口減少や産業、生活の変化はやむをえない部分があり嘆いてばかりではられません。昨年、小豆島町の要請で空き家調査をしましたが、中山地区の数は33件ありました。もし魅力ある住みやすい村になったら移住者も増えてくれることを期待しております。以上、個人的な感想を交えて、中山地区の課題を述べてまいりました。村おこしの一部に皆さんが手を差し伸べてくださっているわけですが、立場や本業は別のところにあると思っております。しかし、農業あるいは、協働作業を通じて、研究、調査の対象にしたり、地区の課題解決に対して提案していただけると幸いです。

皆さんが取り組んでおられる詳しいことは分かりませんが、こちらの課題を思いつくままに挙げさせてもらいますと、棚田の農作業がやりやすいインフラ整備ができないか、あるいは、棚田や中山に適した裏作物を棚田で栽培できないか、里山の畑をもう一度復活できないか、設置や維持がしやすい獣害防御法は他にないのか、空き家の活用をどうしていったらいいのか、また、週末などに利用し寝食できる作業用のロッジのようなものがないだろうか、などがあります。

交流やかかわりは長く続けることに価値があります。そのためにはお互い関心があるテーマに向かって協働することが大切であると考えております。たとえテーマは小さくても一過性ではなく、毎年この中山地区に来てくれる学生さんがテーマを共有して、テーマを何とかやり遂げることです。同じ地域に長く住んでいると、視野が狭くなりがちです。若い感性と情熱を期待しております。要望や意見などがありましたら、遠慮なくどんどん言ってください。今後とも、よろしく願いいたします。



学生と稲刈り



学生と懇談

かしわしま ■柏島サイト

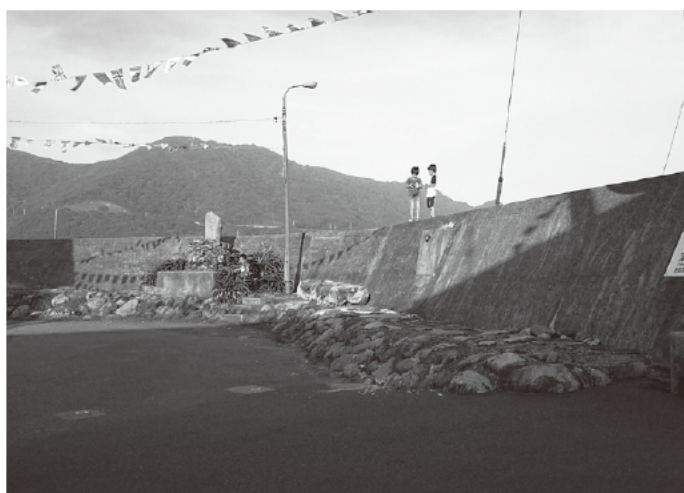
柏島は高知県の西南端にあり、高知市内から約162km、車で約5時間分の距離にある。周囲約4キロの小さな島で、本島と柏島は2本の橋で結ばれており、柏島の目の前には沖の島や鶴来島を望むことができる。島の大半がなだらかな丘陵で、島の北東に集落がある。ちょうど太平洋と豊後水道の境に位置するため、黒潮の流入で海は温暖である。このため1,000種類近い魚種が確認されている。夏はスキューバダイビングや釣りの観光客でにぎわっている。また島の東側と半島に囲まれた湾では、養殖が盛んに行われている。



現在、高知大学のSLPは3つのフィールドで活動を行っているが、SLP初年度に、この柏島1サイトからスタートした。学生は、SLPで柏島に入ると、まず、魚類生態学者でもあるNPO法人黒潮実感センター長の神田優さんから柏島のこと、NPO活動のこと、神田さんが柏島で行ってきた数々の取り組みについて講義を受ける。学生は、神田さんから地域で暮らすことの難しさや喜びといったことを聞き、「きれいな海」だけではない柏島を知る。参加する学生は年毎に変わるので、取り組みが変わるのもいたし方ないが、プログラムとしての積み重ねも意識してはいたくない。



学生は、柏島の自然環境のみならず、「島の中」にも視点を置き、柏島の方々から島の昔話や生活、女性グループの方からは、郷土料理を作る体験をさせていただいたり、それらにまつわる話を伺ったり、インドネシア学生は着物の着付けをしていただいた。高知の西の「端っこ」柏島で多くの学びと温かさをいただいている。



柏島の方々と(平成25年度)



海岸清掃(平成26年度)



地元の女性グループに郷土料理を教えていただく(平成26年度)



地元の夏祭りにて(平成27年度)



天草干しの手伝い(平成28年度)



地元の保育園にて(平成28年度)



私を変えてくれた場所

高知大学 農林海洋科学部 農芸化学科
南 悠花
柏島サイト(平成28年度)

私は入学当初開催されたオリエンテーションでSUIJIの説明を聞き、農山漁村地域に滞在して活動するのは普通の講義ではできないことで、貴重な学びや経験ができると思い、参加しようと決めた。

平成28年8月から9月にかけて実施された「ベーシック国内サービ斯拉ーニング」を履修し、高知県大月町柏島地区で私を含め日本人学生6名、インドネシア学生4名と活動した。サイト活動で一番印象に残ったことは、白浜海岸での清掃活動だ。私達の清掃活動を見ていた海水浴客がゴミを拾って持ってきてくれた。私達が行動を起こすことで他人の心を動かすことができた。しかし、その日の午後また海岸に行くときゴミが落ちていた。風で自分達の空の菓子袋が飛んでいくのを笑っている海水浴客がいて、拾いに行く様子はなかった。ゴミ問題の解決には多くの人の意識を変える必要があり、解決が困難な現実をみた。自分には何ができるのだろうと考えさせられた。

SUIJIへの参加は、「これからは積極的に自分の意見を発言しよう」と思わせてくれるものだった。ディスカッションで積極的に発言しているインドネシア学生に比べ、私は英語に自信がなくあまり発言をすることができなかった。インドネシア学生をみて、いい刺激をもらったので自分を変えていきたい。



気づくことの大切さ

高知大学 農学部 農学科 森林科学コース
橋本 祐真
柏島サイト(平成27年度)

私は平成27年の夏、国内サービ斯拉ーニングを履修し、柏島サイトに参加した。自分のコミュニケーション能力を高めるためが一番の動機として参加した。私は初対面の人とコミュニケーションをとることが苦手だ。サービ斯拉ーニングプログラムを履修する前段として履修する「地域未来創成入門」では特にグループワークを中心に行っていたこともあり、このような演習や地域の人たちと自分から話しに行くことによって克服することができるのではと考えた。

柏島は自然も印象に残っているが、それよりも住民の心の温かさがとても印象に残った。自分が内気な性格もあり、始めはあいさつ程度に話すくらいだったが、その中でも親しげに話しかけてくれたり、次第にお菓子をふるまってもらったり、昔の話を熱心に語ってくれるなど快く対応していただき自分の心も温かくなった。

衝撃的だったことは、柏島は海がとてもきれいだが、その砂浜がゴミによってとても汚れていたことだ。せっかくきれいな海なのに大半は海水浴客によって汚されてしまっていた。その掃除の作業は大変であった。

SUIJIでの活動中は、自分のことをよく見直すことができるものだと感じた。自分にとってどのような役回りがあるのか、周囲はどのようなことを求めているのか、などいろんな気づきを与えてくれるものであった。

SUIJIでの経験は日常生活やそれ以外の時間での気づきをもたらしてくれる。例えば、会社での新しい商品の開発から、いつも散歩しているコースに咲いた一輪のタンポポに気づくまでに至るまで、気づきの大小の違いはあるが、それらの気づきは那人にとって人生を豊かにしてくれるものであると私は思う。

地域に入るといふこと

～SUIJIサービ斯拉ーニングプログラムの5年を振り返って～

NPO法人黒潮実感センター センター長 神田 優

当センターは、平成25年から4ヵ年、SUIJI-SLPを受け入れてきた。当初このサービ斯拉ーニングの内容がなかなか理解しづらかったことと、このような短期で地域の課題を抽出し、それを解決するためのアクションを起こそうという計画に無理を感じたのが正直なところである。受け入れ窓口となっている当センターのことについての事前学習が不十分な感じがした。単にワークスペースと宿泊場所を提供しているところというような感じを持っている学生も少なからずいた年もあった。すべての学生がそうであった訳ではないが、地域の人に話を伺う際の姿勢がなっていない学生もいた。自分たちがどういう立場で、何を求めてこの地に実習をしにきているのか、もっとしっかり認識する必要がある。

また継続して参加する学生が数名はいたが、毎年学生がかわって、一からプログラムを作り上げるため、毎回地域住民と仲良くなるための交流に終始している感があり、3年間の継続プログラムであってもあまり進展は見られないと感じた。年に一回、夏の一時期のみ来て交流活動をしているだけでは、地域の課題やそれを解決するためのアクションにはつながっていない。

インドネシア学生を受け入れるに当たって、地域でのキーパーソンとなる人に事前に話をしておき、学生が聞き取りに来たりしたときには協力してもらうようお願いしておいた。地域の反応は、「せっかく外国から学生が来るのでおもてなしをして歓迎しよう」という雰囲気があり、特に毎回最終日の成果発表会には子ども達からお年寄りまで多数の島民が集まってくれて、いっしょに踊ったり、自分たちが若い頃着ていた着物を持ってきて着付けてくれたりして、学生達にはとてもいい交流ができたのではないと思う。インドネシアの学生とのコミュニケーションに関しては、言葉の壁がありお互いの考えや思いが十分に伝わらなかったのではないかと感じた。そのあたりの学生もしくは教官のフォローが欲しかった。

夏のサービ斯拉ーニング期間中以外で、島の祭りやイベントなどの時に自発的に参加してくれる学生らは島民もよく覚えていてくれて、お祭りの慰労の席や、自宅での食事に誘ってくれたり、一緒にカラオケをしたり、自分たちの子どもや孫のようにかわいくなって交流が生まれている点はすごくよかったと思う。しかし、それはSUIJIのサービ斯拉ーニングというプログラム期間だけでなく、自発的に地域に入って交流したいという想いを持った学生のみが得られる果実だと思ふ。大学の中だけでは得られない地域の人との交流のきっかけとしては、SUIJIのサービ斯拉ーニングは有効だと感じた。地域課題の解決にはまずその地域を知り、そこに住む人の生活に思いを寄せ、他人事ではなく自分事として感じる気持ちが重要だと思ふ。

わずかな期間で地域課題の抽出とその課題を解決しようと思っても、問題はそんな簡単に解決するようなものではない。本当の課題を聞き取るにはもっと相手の懐深くに入り込むような真摯な姿勢が必要である。上でも書いたが他人事じゃなく自分事として捉える「当事者意識」を持つ事ができなければ、真の課題は解決しない。今回のサービ斯拉ーニングは地域に入るとはということなのか？を学ぶ前段の、地域の人達との関係を作る最初の第一歩であると認識すべきだと思ふ。

地域の人(社会人)との関わりの中で、地域の中で暮らすとはどういうことなのか？人と人との関係性、価値観の多様性などについて積極的に学んで欲しいと思ふ。

以上あえて辛口のコメントを書いたが、それは学生達が今後社会や地域に入って生活していく際に、自らも社会の一員となる上で必要不可欠なことだと思ふので書かせてもらった。

言語や習慣、宗教的背景、価値観も異なる外国人学生といっしょに、両国のタイプの違う地域に入って学ぶことができたことは、今後の人生の上で大きな価値があると思われる。サービ斯拉ーニング終了後も、柏島を第二のふるさとと思ふ、いつでも島に帰ってきてもらいたいと思ふ。



平成28年度の参加学生と(前列中央が神田センター長)

やすだ 安田サイト

安田町は高知県の東部に位置し、高知市内から約50km、車で約1時間30分の距離にある。町の南側は太平洋に面し、町の中心部は清流・安田川が流れている。温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、蔬菜園芸の発祥の地として施設野菜を中心に農業の町として発展してきた。また、町北部は露地野菜の他、柚子や自然薯が栽培されている。

安田町の総面積の79%を山林が占め、降り注ぐ雨を貯え、安田の町を守っている。

安田町も人口減少・少子高齢化の進行に伴い、核家族や高齢者のみの世帯が増加するなど、人口構造や世帯構造の変化がもたらす課題に対して地域全体で取り組み、人口減少を前提とした対応が必要となっている。

安田町は、安田地区と中山地区の大きく2つに分かれており、学生が活動するサイトは中山地区で、中でも特に小川集落に滞在した。SUIJI-SLPとしては平成25年度が初年度で平成28年度までの4年間、活動を行ってきた。この地域は、地域の人々の強力な繋がりや生活の知恵、人の手がかつ技術・手仕事など、学生にとって「生きる力」とは、「持続可能な社会」とは、「自分たちが人生の先輩から継承していくべきものは何なのか」ということについて、学び、深く考える機会をもたらしてくれた地域である。

国内SL終了後も、12月に開催される地域のイベント「なかやま山芋まつり」のお手伝いする学生や安田町の郷土料理について取材をする学生団体が、安田町を「第二のふるさと」の如く思い、そして地域の方々にお世話になっている。



地域の方から聞き取り調査(平成26年度)



近くのキャンプ場の整備作業(平成26年度)



手作りの「そうめん流し」(平成27年度)



オクラの収穫体験(平成27年度)



地域の方々とインドネシア料理を(平成28年度)



写真コンテスト(平成28年度)



安田から見えてきたこと

高知大学 農学部 農学科 流域環境工学コース
上柿 佳菜
安田サイト(平成28年度)

私は平成28年8月から9月に実施されたSUIJI国内SLで安田サイトに参加し、活動しました。私がSUIJI国内SLに参加した理由は、新しいことに挑戦したいと考えたからです。日本学生だけでなく、インドネシア学生と一緒に2週間近く寝泊まりし、活動できることはとても魅力的に感じました。実際に安田サイトに入って感じたことは、とても活動的な地域だということです。私たちがいないときの様子は分かりませんが、私たちが主に活動した小川集落というより安田町自体が地域の魅力を発信することに力を入れているなど感じました。また、地域の方々には優しく、パーベキューのセットを貸して下さったり、鮎を焼いてくださったりしました。他にもたくさんの差し入れを頂き、伝統文化や遊びの体験をさせて頂きました。地域の方々から温かく迎えてくださったことで、とても楽しく活動を行うことができました。そして、メンバー間で、どうしたら地域の方々へ感謝と地域の魅力を伝えられるかを真剣に悩みました。

SUIJIの活動で考えさせられたことは、一番はやはり言語の大切さです。SUIJIに行く前にはインドネシア学生との交流をあまり想像できず、何とかなるだろうと本番に挑みました。実際は伝えたいことがうまく英語にできず、気持ちや情報を共有できませんでした。インドネシア学生だけでなく、日本学生同士での対話も難しかったです。私自身、少し自分の意見を押し付けすぎたかなと反省しています。言語をただ使えるようになるだけではなく、どう使うかも学んでいかなければならないと感じました。

SUIJIでの経験により、自分の将来等についてもっと具体的に考えていく必要があると感じました。私たちはグループで活動しましたが、目標が定まっていなくて、グループのメンバーも落ち着かなかったと思います。これは個人的にも同じであると思います。残りの大学生活は目標をしっかりと定め、やりたいことを漏らさずやっていきたいと考えています。



安田町で開拓！～私にとっての最高の学び場～

高知大学 農学部 農学科 暖地農学コース
岡本 晴佳
安田サイト(平成27年度)

私は平成27年8月から9月にかけてSUIJI国内SLに参加し、高知県安芸郡安田町で活動した。参加した動機は、大学生にしかできない学びがしたい、地域のことを知りたいと思ったからである。「地域」というフィールドに出て、実際に自分の目で見たり体験したりして学びを深められると思った。さらに、6大学の学生が集まり3週間を共にすることで人間的にも成長できるチャンスだと思った。そして、増田先生や藤野先生によるプログラム紹介を聞いて地域での活動が楽しそうだと感じたことが参加する決め手となった。

私が安田サイトで一番印象に残ったことは、地域独特の伝統を築き、それを残していくことの難しさである。実際に地域の方の話聞いて、小川集落の獅子舞、田舎寿司や田舎饅頭など、伝統ある行事や郷土料理が少子高齢化によって継承することが困難である現状を知った。しかし、このことは小川集落だけでなく全国どの地域にも共通する課題であると思った。

私が安田の地域の方々から学んだことは、人とのつながりや出会いを大切にすることである。地域住民同士の信頼関係が築かれていることに驚き、学生を温かく迎えてくれる雰囲気がとても嬉しかった。私も地域の方々から頂いた温かいコミュニケーションを次世代の子どもたちに伝えていこうと思った。

私は、SUIJIに参加したことで自分の学びのフィールドが大きく広がったと感じている。SUIJIプログラムを卒業した今、地域で学ぶ楽しさを知り、「安田(あんだ)の食 応援隊」という団体を立ち上げ、安田の「食(郷土料理)」を追いかけるため、SUIJI後も何度も安田へ足を運んでいる。自分にとっての学びの場が安田にはあり、地域の方一人一人が恩師である。また、SUIJIで出会えた仲間とは、今でも互いを励まし合える関係であり、自慢の級友であることは間違いないと胸を張って言える。



山の中の学び舎

安田町ふるさと応援隊 横田 光貴

どこか、中山地区内で長期滞在できる施設はないだろうか、と高知大学の増田先生から尋ねられたのが、私がSUIJIプログラムと関わった第一歩だった。仕事柄、地域と大学を繋ぐ役目を持っていた私は思いつく候補をいくつか挙げ、実際に現地まで案内し、その中でSUIJIプログラムの実習地として選ばれたのが、私の出身である小川集落にある「せせらぎの郷小川」だった。

幼いころから育った小川集落という所は、余所からの人の受け入れに寛容で、また人当たりも良く、話好きの人が集まっている、そういう集落だと私はしっていたので、受け入れに関しては問題ないだろうと考えた。さらに、せせらぎの郷は以前にも高知大学の実習の受け入れもしていた実績もあり、受け入れに関してスムーズに話が進むであろうと容易に考えられた。

実際に小川集落の方々に話を持って行ったところ、滞在日数の長さや人数には驚かれたものの、皆さん私の想像通り簡単に受け入れてくれたように感じた。すぐに顔合わせの懇親会の話やどんな作業を手伝ってもらうかという話が出てきて、早くから受け入れ態勢が出来ていたのはさすがだと感じたし、誇れるものだった。

実習中は農作業をなにかということ、時期的には丁度オクラが全盛期で、また私の実家がオクラ農家ということもあり、すんなりと実習先が決まった。父も祖父も話好きでコミュニケーション能力が高かったのも、安心して任せることが出来た。

その他、紫陽花の世話の仕方、鮎の取り方、田舎饅頭や田舎寿司の作り方など、地元の方が長年培ってきた技術を学生らに伝えられていた。地元の方々には予定が無くとも学生たちの要望に応え、すぐさま対応してくれたため、こちらとしてもすごく話を通しやすく、また間に私が入ることなく学生と地元の方が直接話をして活動していたと聞き、学生たちの積極性に驚かされた。

私は仕事柄と、実習先が家の近所だったこともあり、学生たちと多くかかわる機会があった。最初は長期の滞在と、学生たちが主体となり活動内容を決めると聞いていたので、申だるみになってしまったり、だらけてしまうのではと考えていた。しかし実際に関わってみると、学生たちはSUIJIの短い期間内で何かを掴もうと積極的に集落に足を運び、自ら作業の手伝いを申し出、興味を持ったことはすぐに尋ねると、非常に精力的に活動していた。彼らのそんな姿を見ると、出来る限り協力してあげないと、と感じた。おそらくは集落の方々も同じように感じたのではないと思う。

SUIJIを通して特に感じたことの一つに何名かの学生が一度だけでなく二度目も小川集落を選択してきてくれたということと、SUIJIが終わった後も再度訪問してくれたことがある。かれらがSUIJIを通して小川集落で何かを掴み、また小川集落に来たいと感じてくれたことは素直にうれしく感じる。地元の者ではわからない田舎の魅力という者が彼らに感じられたということは、そこになにか小川集落の大事なことがあるということだ。まだそれが何かはわからないが、それがそこにある、ということを感じさせてくれたことは、小川集落にとって大きなものとなっていくことだろう。

これからも学生と地元住民、お互いがそれぞれから学べる機会を大事にしていきたい。

むろと 室戸サイト

室戸市は高知県の東端に位置し、太平洋に突き出た室戸岬で広く知られている。海底プレート移動によって押し上げられた褶曲した地層、海岸段丘の発達した西岸、海岸から比較的近距离で深海となる東岸と、室戸一帯の地質はきわめてユニークで、UNESCOの世界ジオパークに登録されている。

室戸サイトの活動拠点は市内北東域に位置する佐喜浜町で、2016年8月時点での地区人口は1,444人（803世帯）である。町域の真ん中を佐喜浜川が流れ、河口付近の平地に佐喜浜町の中心地域が広がる。佐喜浜川の源流域



は国有林となっており、かつては林業で栄えた。また流域の山地では薪炭が生産され、佐喜浜は関西方面への集積地として栄えた。このように、佐喜浜では山・川・海のすべてが身近にある。

中心地区は「浦」区とよばれ、かつては若者宿などの風習もあった。佐喜浜町のもっとも大きな祭事は、佐喜浜八幡宮で10月に開催される大祭で、暴れ獅子舞と即興芝居である俄（にわか）芝居である。俄は高知県の無形民俗文化財に指定されている。地域の主な産業は一次産業で、今日でも盛んなのは漁業と製炭業である。漁業では個人経営による沿岸漁も行われているが、大々的に行われているのは大敷網漁である。大敷網は大型定置網の一つで、とくに冬期のブリ漁の頃には港は活気づく。一方の炭焼きは、ウバメガシやその他カシ類を原木とした高品質なもので、土佐備長炭の名で知られる。

サービ斯拉ーニングの活動は、浦区にある佐喜浜生活改善センターに滞在しながら行われた。学生たちは地域を探索したり、古老や農家、製炭業者、漁協などから地域の歴史、産業、暮らしについての話を聞いたりしながら、各自の関心あるテーマを見つけ、それを掘り下げることを目指した。そのほか、地元の小中学校との交流も数回に分けて取り組んできた。とくに中学校では、インドネシア料理をつくったり、総合学習の一環で毎年テーマを設けて発表会・討論会を行ったりしている。また、生徒たちと仲良くなった学生たちの中には、子供たちに連れられ川にテナガエビ獲りに出かけるものもある。この他にも地元NPOである『佐喜浜元気プロジェクト』や老人会のイベントなどの機会を通じて、地域のさまざまな方々とふれあうことを心がけた。こうした活動を通じて、地域の暮らしの現状を学びつつ、伝統や豊かな自然環境を活かしたかたちで地域の魅力を見つけ出そうとした。サイト滞在の最後には地域の方々に向けた報告会を開き、各自が期間中に学んだこと・考えたことを伝え、意見交換をした。サービ斯拉ーニング終了後も八幡宮の大祭やNPOのイベントなどの機会に佐喜浜を訪問しながら、関わりを続けている。



地元料理「こけら寿司」の作り方を習う（平成26年度）



小学生たちからテナガエビ突きを習う（平成26年度）



土佐備長炭の窯出し作業を見学する（平成27年度）



中学生とインドネシア料理を作りながら交流する（平成27年度）



地元のおばちゃんと（平成27年度）



さきはマニア（平成28年度）



農家から稲作について伺う（平成28年度）



サイト活動で学んだこと・考えたことを地域の方々伝える（平成28年度）



「Be a SAKIHAMANIA」

香川大学 農学部 応用生物科学科 応用生命科学コース
夏目 佳奈
室戸サイト(平成27年度、平成28年度)

私が国内SLに参加した理由は、海外に行きたいと思う一方で、まずは日本の農山漁村に行って現状を知る必要があると思ったからだ。室戸サイトを選んだ理由は、他のサイトと違い観光村や農村ではなく、漁業や備長炭が有名であったことと、室戸岬の自然を感じたいと思ったからだ。

アドバンスドとして参加した2回目で、前年には見つけられなかった佐喜浜の良さを発見することが出来た。また、佐喜浜にとっての地域活性化とは何かをメンバー全員で夜中まで議論したことが一番の思い出で、2年目でやっとそれを考えることが出来た。地域に向けた最終発表では、気持ちが思い上がってしまい号泣してしまった。その時、自分はそれだけ佐喜浜が好きで、本気で活動して、地域の人やメンバーが大好きだったんだということに気が付いた。

SUIJIをきっかけに、佐喜浜だけでなく、同じような地域がFacebook等で発信する情報にアンテナがたつようになった。SUIJIの活動以外に地域の大祭などでも訪れるうちに、どれだけ佐喜浜の景色が美しくても、あの地域の人がそこにいなかったら私はそこに戻る理由がないと思うようになった。つまりSUIJIで第2の故郷が出来たのである。



学びの連続だった室戸での2週間

香川大学 農学部 応用生物科学科 生物資源機能科学コース
尾崎 佳苗
室戸サイト(平成26年度)

参加した一番の理由は海外留学に興味があったから。また、視野がせまく殻にこもりがちな自分を成長させたかったので、知らない場所で初めて会う人たちと協力し課題を解決していくという活動内容に惹かれ参加を決めた。

私たち室戸メンバーは改善センターというところで寝泊まりしていたのだが、改善センターの館長さんはいつでも私たちの活動の相談に快く乗ってくれ、毎晩行っていたミーティングにも欠かさず参加してくれていた。国内SL中盤、自分勝手に活動を進める私たちを見かね、館長さんは私たちを叱った。私たちの活動は地域の人あつての活動であることに改めて気づかされ、地域の課題を解決する以前の、常識やマナーを守ることや感謝の気持ちを持つことの大切さについても考えさせられた。親身になって下さり、時に優しく時に厳しくたくさんのことを教えてくれた館長さんとのやりとりの中でのこの出来事が一番印象に残っている。

SUIJIで実際にやってみると上手くいかない困難から、簡単そうだけれど出来ていないことにたくさん気づき、どうすれば上手くいくのか考えることで学んだ。これらの数多くの小さな学びは日々の生活の中で、意識することで活かされている。また、インドネシアの学生との交流を通して英語でのコミュニケーションの苦手意識がなくなったことでSUIJI後、留学生との交流に積極的になれた。このことで友人関係を広げることが出来、視野も広がった。



SUIJIについて

室戸市地域コーディネーター佐喜浜地区担当 山本 裕子

SUIJIが佐喜浜サイトへ来た最初の年は、学生たちと時々顔を合わせるだけだった。何の団体かよくわからず、大学生がこの町へ合宿か何かに来ているのだと思っていた。私がSUIJIと関わるようになったのは、前年度にお世話していた方から引き継いだ平成27年からで、この時からやっとSUIIのことが少しずつわかりはじめた。インドネシア学生について地域の皆さんから聞かれることもあったが、その度に「インドネシアから勉強しに来ている大学生です」と説明した。

今年は昨年に続き、佐喜浜サイト2年目の日本学生2名が来てくれるとわかっていたので、今までの反省点や改善点を事前に話し合った。そして打合せをして、いくつかの予定を立てて準備をもらった。まず、参加する学生のプロフィールを書いてもらい、私の所へ送ってもらった。つぎに、SUIJIが今年も佐喜浜に来ることと滞在期間を知らせるポスターを学生に書いてもらった。そして、ポスターを私に送付してもらい、私はそれを町のアチコチに貼ってきた。また、学生たちの行動範囲が広がるように、地域の皆さんから自転車を借り集めてきた。佐喜浜に来る学生の人数が事前にわかっていたので、人数分を用意でき、かなり準備することができた。小学校と中学校との交流も今年は事前に打合せをしたおかげで段取り良く進んだように思う。

期間中、私はほぼ毎日SUIJIの学生たちと関わり、一緒に過ごした。今年の学生はとても素直で真面目だったし、私もSUIJIとの関わりは二年目となり要領がわかっていたので、お互いにとっても過ごしやすかった気がする。インドネシア学生には、言葉が通じないことと時間を守ってもらえないことが少し残念だったが、そこは日本学生たちがフォローしてくれた。また、今年の学生たちは滞在先の生活改善センターの使い方も注意を守り、行儀もよかった。ずっと長く一緒にいると、自分の子どものように思え、料理を作って食べさせたり、ミーティングに参加したりと、とても楽しかった。

学生たちに学んでほしいことは、人と人とのつながりを大切に思いやりを持ち、沢山の人の支えで自分たちが日々暮らしているを感じながら生きてほしいということだ。今年の学生たちは、言わなくてもそれがわかってくれている子たちだった。だから私は、ずっと関わっていたくて、昨年は香川へ、今年は愛媛へ、子どもたちに会いに行った。私も子どもたちから多くのことを学んだこともあり、これからも交流が続くことを願っている。私は子どもたちと過ごした思い出を大切にしている。だから今も時折手紙を書いている。

私にSUIJIと関わる機会を与えてくださった方々、協力していただいた全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。



平成27年度の参加学生と(筆者:左から2人目)